甘藷記

特1
2168

国立国会図書館　タイトル『甘藷記』　請求記号 特1-2168

ガラス使用

甘藷記

国立国会図書館　タイトル『甘藷記』　請求記号 特1-2168

ガラス使用

特1 — 2168

重刻甘藷記序

余ガ友青敦書向ニ承命種甘藷以試ニ成熟而詳ニ記其種法及切用為一小冊ト刊布之ヲ盡此物甘美無毒特為救荒之最要故欲令農夫倣其法廣種以為用也實仁民之至矣哉此冊獨行於関東而未遍畿邦其友人鈴木俊民者深惜之乃自大坂通書青氏請寓刻之青氏稟官而許焉令余序之嘗聞壬子歳西州大蝗赤地千里饑民枕藉道路官速遣使賑恤之而不能遍済獨種甘藷之

文庫
多人行通
舎所蔵

国立国会図書館　タイトル『甘藷記』　請求記号 特1-2168　ガラス使用

邑居然無事民免菜色其傍邑亦賴之活者甚衆其為荒政第一之策者可以證焉然今大坂富甲天下巨豪列屋一食費萬錢夫侈靡之俗一聞救饑之説豈不驚異耶虽然居安不忘危聖人之教也則此刻或亦足為厭膏粱者一鑒云

延享乙丑仲冬日　東都呂實夫元丈撰

凡農民の助るへき色のいさうはいもを第一とす去ともれも似く習ふ事なれい出来ぬ事なり同書并農政全書等云唐の書物云々并諸書を考へ

一

切紙にて作りやう乃肝要を去ます味甘く手すれ毒なく虚弱なき人ハ肝をすこやかにし腎をたすけ其功山の芋と同し但生の食ふ成すれ毒多くいとひおそれ此いもを切て日に干て米のごとく切て飯にたき食ふ島あり二三所の人こゝ百余歳の毒を免れもつて云養ても生ても共に常に用ひ

一

ふつて茹すれ呑もよし茎も葉も常に用ひさるまいもす十三すれる功能ひろし其一部なるに数十石出来る功能ひろし其二色白く味ひすし

三葉くさ山の芋くず切干　廿四日茎菜類
種子今年のうき一ヶ年未年ゑ数百前の形
へうたん原廿五うき葉ゆ付く四ゆ根原
友風日ゆ損ず廿六日数色のかたくゆ形
きくんのうざいひをまぬの原廿七葉ゆ同茎
色うもけすもゆる廿八酒ゆ原る廿九物ゆ
く飯すんくう廿十生ゆ煮ても食る廿十
一作る麦ほ之ゆ利多く原ゆ廿十二
春夏うくく九十ゆうう花さあく茎葉かれ
うくきのれ城うゆ土をうけゆ九ゆうても

一
くゆ多る廿十三蝗の害をうけゆ
此ゆも所る島ゆう唐の間ゆ始くゆる時其
地きくんゆれも一年の食物くゆく五穀生を
さるや世地ゆ破地すもくく出る両年ゆ引く
くう日ゆ年ゆこや生さるも大き一すゆかゆ
出る野原年ゆの毎日の地ゆうれ実穀つる
十倍の利あく数年をへすて野原もきゆけ
くゆう墳所の地ゆ引くく
一
うくる法ゆ十二月ゆ多ゆ二ゆ多く毒のひの
んゆうゆ原ゆ灰ほくゆ牛馬の糞を土ゆまをや

うゑのよはさ二尺程すゝいも多秧を二三すゝ
きうゑ土を寄すゝけ山のつもをうゑるこゝろ
〳〵百姓こゝろ申〳〵茎をびこ乱時切別さし
ても多秧をうゑこゝろ同前いも出る又多
秧も二寸丈ゆゑ切ゆゑ植を上すゝて土をこのける
四五尺斗ゆゑゝき四〳〵四方付ゝ切て四三
つゝ土をかけ一口ゝ土のこゝ出うゑるもこゝろ多
なゝすゝこゝろ〳〵かゝす少日四ゝうゑる
別てよ〳〵茎のひるほゝゝ根もゆびるりのこて
ろくみゝく肥すゝ春のひゝゝうゑる時

一

た秧を半分残〳〵をきて霜降りゝき
れいのこゝをきゝ多秧をゆゝて七月書
こゝろうゑこゝろ

一

種を日ほゝかゝこの西風ゆゝこゝ乱事面の
日あゝゝゝき所ゝゝゝて西風ゆゝゝる
中ゝこのこひおきゝゝよゝ黒いもをかゝゝたゝ
同〳〵ゆゝあゝよゝ山岡すゝ土穴ゝゝ入かこ
ひゝくゝ

一

種をゝゝをきゝ九月中すゝゝ陸をまゝゝき
所すゝゝ早く種をゝゝかこひゝくゝゝゝこの

時は五月十日のきわまりまく土をきてもと
冬中土をきい冬至の後三ヶ月ばかり
一 茎二三寸ばかりを切りとり出る土をかけ
さかりとく何ぞ前より根生る時つきるつる
成きれいつるの勢つきるとうしろ切るつる
八月より九月 馬ばかりを写かす
いるなり草木をくひたす時も此手の
根生ずあれいるなり害をうけず
茎葉のこと出るとくれもいるなり

一 出はくくくくと結成し土をかれい出来れ
ちいらく出来るなりやや農人一年も仰
すれいいとをのようとうあの中の分
一世世世世ひろまるいなれ天下の
餓人なかるべく
一 唐乃地い祐ちなくりあの土くまされ
ちくいくいくいき説之前漢書食貨志
以唐の書は歳ちまるを不
易の上田くに一畝や十すまをうるを一
易九中田くに二畝やちまする成

再興の下田に換へあげ申の地に二年も
やすまず事はかくこそ下田や作り習
ふ仕なれも十分よりさらんや
かくのごとく農民乃為益あるものに
れい作り習ひ来りきく世に生るものし
聖王民を免くもみ法つくりいとなん
ものしたき明の代なも州縣より養濟院を
建て民のかをぎもちぐるもちやし
ちひまひ志めもひとしきを程
を有のごとくあわれい心をたくつて作り形

らんとこいふ志つるま

享保十九年十二月刺草之臣青木敦書

謹記

附録

一 小児乳をもれる用ひくをもつて厚の事
ようつを蓋塊ハ細よくるき乳我
乳ひく少ひくふへ
一 出産之しく腹りやとぐくやを
れとろくるよ古のごとくあん用也
しほ乃やまり妙く但あく用也

一 ほかほかとしたるうちに新鮮
なる内に何なりとも食する間かくべき時生
にて食するもよろしく

一 此もの塩を入れてみるに塩の
ふくさるものは何まさかに多く食べて
もよろしく

一 此もの一度をうすくあき搗(つき)くぐき水
にてうすくをすてうい水をすすぎ
さらし月しろ葛粉のごとく製すべし

一 此もの数年搗きたる仙人掌
粉すくなくとも何なりとも中より製
へし味吉野葛に優れり

一 此もの生めるく木口なく薄く切り
てたくさんかれば四五年搗きたる
くに風より何とかびのはえるごとく

一 此もの煮てまんちゃうやふかんのごと
く薬なる製するもよろしく又生まもき
さに此まする今もよろし

大坂新勘町

延享二年乙丑冬　　鈴木俊民重刻

書肆　浪華　柳原喜兵衛
　　江戸　須原屋茂兵衛

文化十二乙亥年二月三丁写之　　直隆

甘藷

甘藷蓋薯蕷之類或曰芋之類根葉亦如芋
実如拳有大如甌者皮紫而肉白蒸鬻食
之味如薯蕷性不甚冷舊珠崖之地海中之
人皆不業耕稼惟堀地種甘藷秋熟收之
蒸煨切如米粒倉圖貯之以充糧糗是名
藷糧北方人至者或盛其牛豕胯炙而未以
甘藷薦之若粳粟然大抵南人二毛者百
無一二惟海中之人壽百余歲者由不
食五穀而食甘藷故爾　南方草木狀

文化十二乙亥年上月三日

蕃薯（琉球ニテ薩摩芋ト称ス寛永年中ニ渡来ス今ヲ百八十年前）

閩書南産志曰萬曆中閩人得之外國○度閩海而南有呂宋國国度海西為西洋其国有朱薯殺野連山是不待種殖夷人率取食之○恍而不典中國人中国人截取其蔓咫許挾小盒中以来拾是入吾閩○茎葉皆無可棄其直甚賤其能易充能助儉者也耄者食之而不患哽噎能養老者也童孺食之止其啼能慈幼者也○此芋性宜暖を嫌ひ雪霜を恐れ暖国なれども夏の初秋植て秋末より収るものなり

生国に其植て宝余さるの時は暖地にも
山をうけらる陰地は悪く南の陽地を撰ひ土
地の善悪山畑里地の差別なく作る土の
多と嫌ふ故に厩肥芋の新葉に入て土のやと
らぐ中に植て

○苗を仕立るふいりく暖地を撰ひ一反歩に植
へき苗は一畝歩の畑を作り其上に厩肥芋の
苗を仕立て春のひゞく中芋種（形ちちゝふあり　正月　四月　五月　六月　七月　八月　九月　十月　十一月　十二月）
（月々の芋を種）一つ〻きりつきのくを芽わゞ土
をうゝ出て一尺寺程つゝ出て植埋置き

二十日わゝ〻ゝ芽を出て時分芽を取水肥（ごぶ水に小便又は真肥かゝ）加へ
を打切芽伐さゝく多入て置き
青月初梅雨中雨の降心日伐付つゝを切其日
植て又床をやゝ〻ゝ厩肥芋の新高サ一尺
寺程積立一反歩に植る苗床長き二歩わゞ
ふこゝらく芋種数立ひゞ（ひゝくなりつ
きの方芽わゞ出て埋て其上に苗を植
を等分交ゝうすく覆ひ十日余過て芽出
寸程なのび葉に青を見る時芽の地植苗の
如く外の地へ移植（柴床作りまつゝ植付れば
ゝく芽のゝる二ゝらく多

くさぐさの時は
苗代植て

○苗代植る畑一尺二三寸ある所を祝て苗乃つる長八九寸葉乃節三ツ四ツこめし切る七八寸程に動くける半分は土をこのけ植る也是を手植くいふ又たく植の仕のこふける一筋の毛出る尺ともも其余ともつるの指丈をう祝の上まで動ける寄往出一尺程ぐらい土をこのけ動こ手植たく植ともに抜く苗代取まじまし肥を水も及ぶべける海の地は白根ある所時まで生る一節ヶ引起土ら白根を離して

刈ぎれ行るの勢白根にとれて根元の実あ〳〵八月乃初め実入の程を試十月中旬迄は長く畑取て初霜降て葉の枯るを見ば速は残らず畑て寒は逢い多く腐る也平年一反歩の畑は芋三百貫拾貫目収る也予三年乃豊凶を考ふ凡サ年平作二三年凶作あり〳〵も二三分の損之七八年の豊作ハ平年年〳〵一割七割高い一倍も出来増る

○畑上る芋打も麻付さるを撰て掛月三百目〳〵竹ハ春の間不ハ多〳〵夫〳〵大きる

芋ハ其年冬の食も用ひ居宅の床下ハ穴
を掘（用ひ元を金とゝ）芋何程なりとも入藁古俵などを
厚く覆ひ室内の所々ぬきまゝ用ひ三四日
まゝ程ゝ小出しとなる故ハ元のごとく用ひ
○翌年の食用に用ふ芋ハ形大きなるハ
ら〻を月九三五月ゟ内の芋聊も疵なき
根撰ぶも温なる岩の根を掘り穴を掘
一釜ゟ五七荷程ゝ入藁を覆ひ上を
水雪汁聊も入ぬゝふ事なし春ゟ来一釜
取出し食ふへし釜を掘場所あゝ穴ハ

数多く釜ゟも用ひ腐ゆゑ又掘穴を掘つき
地なゝ温なる所ハ穴を掘色も藁を厚
く覆ひ上をのけこのく雨水乃入ぬゝふ
ゝ女なれも雨雪ゟ湯ハ直ゟ腐入一釜残
ら〻腐る也
○ゆゑも疵付る芋ハ至て少ゝ性悪き芋ハ厚二三
分ごとに輪切ゝ日ゟ干ゟ乾き時俵ゟ
入居も器の上ゟ掛け置ハ翌年秋まても味甘
ら〻物此切芋白まゝ蒸き煮挽物すゝ
ゟまゝこ祢用ゟ乃ゟ乾めゟ手ゟ乾ゟ食

甘味にして食易し又雑穀の飯に切干のまゝたき交てもよし味噌に麦をこけら飯にいふ

○至て小人食用に宜しき物にて芋に明き畑に甚まく植

芋は苗植の芋に生えだち七月初めまく實入早く

夫食の助となる也麦を人形にもとゝふ又人形芋

植るも宜しきなりこの屑芋を湯煮て粟の

穂売にもみ交牛馬に飼ふて

○少し節あり〳〵切干人形植るも宜しき屑芋を

入白にして搗碎き汁を取立六遍晒〳〵干て葛

粉の代りに考ふ又黒豆にして葛粉を用ひる

時生芋にまさびおろし直に葛粉の代り

に用ひて

○芋掘取蔓付たる葉共莖共三寸一尺何にもあれ是

を切取日に干貯置湯煮て一日水にさらし煮メ

て食或干ぜんまいの風味あり物にるい木の枝にか

けて牛馬に飼又庭釜のうき物に考て

○焼酎を取法芋拾六貫目皮を去蒸て搗碎き糀

三升加へ瓶に入れ中あよく交て酒に造る

三百目に笹の葉塩十三匁共に綿袋に包三瓶の

中へ入る初めて十日過て釜に入れ煮げん

露を取り（らんびきの如き笠住る色こゝ行　畧さん八多や寄き笠を取る也）是則焼酎
一斗に八七八升ヲ出一斗余取る味らくあるを酒
ふ等

○右ハ記事如く農家ハ大益ある故今西国ハ
諸侯ハこゝを多く植家毎ハ弱く行年中朝夕
乃夫食ハ佐ふ俗ハ若年に達しいくも食ハ
ふきるが〳〵此芋の徳ハ作る法ハ
番く知さる農家ハ勧め知志めんことを願ふ
記事志あるく試ハ植ゝ其能を知ハ戸ハ
幸なん能ハ今まし慰のこゝく食し常夫

食ハせざる国ゝまし俗ハ朝暮蒸食べきば味ハ
飽て終ハ厭ふ物を拾ふく出ことを願ふ
ふ絶ハ力ヲ食則（たゝく〳〵食）小児ハ物々多く喜ゝく食
キ中ハ後年ハ今西国ハ者ら用ハ如く生
民の一助ともなんことを願ふ云爾

文化二乙巳冬十月　崎陽　小賀時胤謹識

蕃薯種類之圖

白芋

至大なるもの
長二尺 巾四寸 一貫三百匁

味よく蕃薯の上品にして
栗に似る也 八里半とも

切て切る圖

国立国会図書館　タイトル『甘藷記』 請求記号 特1-2168
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『甘藷記』　請求記号 特1-2168
ガラス使用

櫻芋

味もくさんぎん芋ホ同

長七寸 巴一尺寺 掛目 壱目

薩摩芋

長一尺 巴一尺寺 掛目 一貫目

甚く辛目舎て実入故ま
辛甘芋とも云味劣る共も
取実多く国ホ腐ス

附食用法

○三ツ葉芋を薄く輪切ゐ　細くきざみ　ちりすのもの
合ゐ用ゐ　又うすく切胡麻油　または　ごま　厚三三
分ゐ切麦粉　酒　骨油　入れ　柿ころもよりけ　油揚
ゐ　用ゐ

○何れ乃芋にても二三分ゐ切　ごまく焼　用ゐ
麦を雑子焼　ゐ

○厚三四分ゐ切　あんかけ　切芋芋の粉　入れ　汁み
ゐ　用ゐ　又ゐの根　くるみ　もの　の歌　仙蓋
干飯　もち　葉　あぐ乃　彩思　ゐの　呂　切芋芋の

特1
2168

物をこの法文にもくさて刻て小口切す
て菓子の用也

○四五分方さいのあり切魚の少大こんぶんぶんの形も
同〜程さいの小切すべし 黄生芋をさいび
おろ〜みるくおろ〜多くいれどろ〜〜葛粉蒸の如く
する是をヒカドと云ふ

○厚さ六分ほど切水を黄玉砂糖を入右はおろ〜芋
を多くいれどろ〜〜なる是琉球ぜんざいと云ふ

○三〇〇〇

国立国会図書館　タイトル『甘藷記』　請求記号 特1-2168

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『甘藷記』 請求記号 特1-2168

ガラス使用